



Title	Work Diaryにみるオニールの夫婦愛 : The Iceman Cometh の一考察
Author(s)	田川, 弘雄
Citation	大阪外大英米研究, 9, p. 7-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99008
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Work Diary にみるオニールの夫婦愛

—The Iceman Cometh の一考察—

田 川 弘 雄

Yale 大学の Eugene O'Neill Collection には、まだ一般研究者には公開されていない部分がかなり残されているが、今年 7 月に開禁されたものがある。オニールの創作日記がそれで、Yale 大学の Beinecke Rare Book and Manuscript Library のライブラリアンである Donald Gallup 氏によってタイプ印字になおされて原本のかわりに公表されたものである。オニール独特のハンドライティングに接することができるのは残念であるが、原本が貴重なものであることを考えると止むを得ないことだろう。この創作日記は 4 卷に分れていて、第 1 卷は 1924 年から 1928 年迄のもので、扉には次のように記してある。

1925 from memory and few records, diary of that year having been stolen and sold by former wife, other four years copied from old diaries.

前夫人との関係が暗示されていて面白い。

1924 January 1 R'field, Conn. ("Brook Farm")

Got idea for "Desire Under the Elms"

という記事で始まり、一日一行づつの記事ではあるが、作品のアイデアを得た日付などが明確になったり、創作の進行具合などが短かい記述のうちに読みとれるし、作品についてのオニールの反応も伺われる。例えば *Desire Under the Elms* は先の記事のように、1924 年の 1 月 1 日に発想したのであるが、もともとのタイトルは *Under the Elms* であり、この月の 15 日から創作を始め、初稿の完成が 6 月 4 日になっている。この間 4 月 23 日には *The Great*

God Brown のアイデアを得、またこの The Great God Brown の創作中に Strange Interlude のアイデアを得ている。常に次作品のアイデアを頭に入れて仕事をしている創作意欲豊かな時期のオニールを髣髴させてくれるのである。

また作品についての記述の他に人間オニールを感じさせる部分も散見する。

1926年7月15日は記念すべき日であった。

Met Carlotta- 1st. time since a moment's introduction at "Hairy Ape" rehearsals

オニールが美人女優 Carlotta Monterey とヨーロッパへ駆落したことは有名であるが、そのなれそめがここにあったことが知らされる。7月23日に会い、更に8月19日、21日と彼女と会う回数が増え、年を越え1927年の5月になると日記に C という略字で記されている Carlotta との逢瀬は殆んど毎日となり、1928年2月10日の N.Y. Exit — S.S. "Berngaria" という記事となり、オニールのいわゆる Elopement にいたるのである。この過程が伝記作者の筆よりも See Carlotta again, To Philharmonic with Carlotta, C. for tea, C. for lunch, C. などの記号によって、はるかに雄弁に語られている。サザンプトンからロンドンを経てパリへ、そしてフランスの Guethary の Villa Marquerite に落ちついて Dynamo の創作にはげむ記事を見ると、この時期に書かれた作品として Dynamo を再評価してみたい気持になる。1928年10月には香港に向けての旅に立つのである。この旅先で感冒を悪化させて、上海で入院する羽目に陥るのだが、この旅の終りでの Carlotta との再会が印象深い。この旅の途中から日記は第2巻にうつるが、1929年1月15日に次の記事が見られる。

S.S. "President Monroe" — (Mediterranean)

Change from "Coblentz" to "President Monroe"

Carlotta again! — and happiness.

再会の喜びが手放して感じられるのであるが、この Carlotta に対するオニールの愛情は異常なほど強烈に長くつづいていく。

1929年～1933年の間のものであるこの第2巻の扉に次の文字が記されている。

To Genie

Let this record be ours & a happy one — of love,
understanding & loyalty always to the end!

Carlotta

Sept. 1931

2人の恋の永遠に続くことを願ったこのCarlottaの言葉は、この日記の中に美事に結実しているといつていいだろう。

1929年7月3日には次の記事が見える。

Cable that divorce granted Reno yesterday! At last, thanks God! Cheers!

待望の離婚が叶えられたのであり、同じく7月22日に "Carlotta & I are married! (Marrie 1^{er} Arondissement) と記してあるように正式に結婚している。そしてフランスの Les Plessis で主として Mourning Becomes Electra の創作に打ち込んだのであり、2人で異郷での楽しいがそれなりに淋しい生活を送ったのであろう。このことはオニールがこの劇の第2草稿を妻に献ずるに際して書きそえた献辞にもよくあらわれている。

To Carlotta

In memory of the interminable days of rain in which you
bravely suffered in silence that this trilogy might be born
— days when I had my work, but you had nothing but household
frets and a blank vista through the salon windows of the
gray land of Le Plessis, with the wet, black trees still and
dripping and the mist wraiths mourning over the droned fields
— days when you had the self-forgetting love to greet my
depressing, sunk preoccupations with a courageous, cheering

banter — days which must have been for you bitterly lonely when I seemed far away and lost in a grim, savage, gloomy country of my own, —days which must have been for you like hateful, boring, inseparable enemies nagging at nerves until an intolerable ennui and life sickness poisoned your spirit —In short, days in which you collaborated, as only deep love can, in the writing of this dramas of the damned. These scripts are rightly yours and my presenting them is a gift of what is yours already. Let us hope what sound worth the trilogy may have in it will repay the travail you have gone through for its sake! I want these scripts to remind you that I have known your love with my love even when I have seemed not to know, that I have seen it even when I have appeared most blind; that I have felt it most warmly around me always (even in my study in the closing pages of an act!) sustaining and comforting, a warm secure sanctuary for the man after the authors desparing solitude and inevitable defeats, a victory of love-in-life —mother and wife and mistress and friend! And collaborator!

Collaborator, I love you!

Gene

Le Plessis April 23rd, 1931

創作に打ち込んでいる傍で孤独に耐えながらつくしてくれた妻に対するオニールの切々たる情が感じとられるのである。とくに終りの方の「人の世の愛の勝利であり、母であり妻であり、情婦であり友であり、そして協力者である」といった感じは「駄落ち」3年目に至ってもなお新鮮なそして熟した愛情を感じるのである。この気持は Mourning Becomes Electra を引っさげてアメリカ

へ帰ってからも変るどころか、一層強くなつていったようである。帰米後暫ら
ニューヨークに住んだのちオニール夫妻はジョージア州の Sea Island に落ち
つくのであるが Carlotta がニューヨークへ用事で出かけている数日の日記に
異常なまでの恋しさの気持が記されている。

1932 May

16 Carlotta leaves for N.Y. — I am desolate — wrote her.
17 Wrote Carlotta — miss her like hell! 2 wires from C.
18 Wired C & wrote her.
19 2 letters from C — adore her! — letter to her.
20 4 letters from C — miss her like hell! — letter to her.
21 4 letters from C — wrote her.
22 3 letters from C & she phoned in eve. — wonderful to
hear her voice — wrote her
25 4 letters from C — wrote her the letter — prose poem to
her — expresses all she meant to me.
30 Carlotta returns! (meet train Thaleman 6.34) so damned
happy!

夫婦がしばらく別れると恋しくなるのは当然でもあっても、これほど恋慕うも
ものだろうか。この期間中にオニールが *Without Endings of days (Days
Without End)* の創作に取組んでいたことも興味がある。4 度も書きかえた結
末もこの Carlotta への思慕と関係があるのだろうか。

この年の 6 月にこの地 Sea Island に家を建て次の記事のようになつた
ところ。

22 We move into Our New Home! (wonderful feeling that this
is home we have built — never built one before.
27 We decided on name for house "Casa Genotta" (combination
of Gene & Carlotta)

2人の名前を組合わせた愛の巣の完成したのもこの時期だった。そして翌年 Ah Wilderness!の第2稿が完成した頃に新築1周年を迎えるのであるがその日の記事には喜びの確認がある。

1933 June 22 Anniversary Year in "Casa Genota" Sure feels like final home to Carlotta and I.

この幸福にもオニール自身の病気という暗い陰が近づいていた。

1934 March 23 Doc. W. (tell me on verge of nervous breakdown — also faint indication apex right lung — must rest for 6 mos — no work — or complete collapse) Weight 137 (minus coat & vest) —I start taking insulin to put on weight.

病気の療養に専念しながらも、Cycleという大きな連作を発想し、作劇しようとするがあまりはかどらない。そしてこの愛の巣 Casa Genotaについても健康上よくないと感じだす。

1936 October 4 — will be glad to leave this place —hope we can sell it soon — climate no good for work half of year — and feel jinxed here.

そしてこの地を離れて西海岸へ向う。その旅先のSeattleでノーベル賞受賞の報に大いに喜ぶのであるが、健康は回復せず、Oaklandの病院へ入院しなければならなくなる。ノーベル賞のメダルも賞金もこの病院へ伝達されたが、その喜びよりも妻がSea Islandの家を始末するために留守にした淋しさの方が日記には強くでている。

1937年2月の日記には5年前と同じくWires to & from C — letters from herという記事と狂わしいばかりの Carlotta恋しさの文字が並んでいる。そして彼女が帰って来た3月2日には自分が病院から抜け出して「新婚旅行」を計画するほどの喜びようであった。

Get up 6 — meet C. 11th St. Sta at 7.45 —God, but so wonder-

ful see her again! — to Fairmount — shown to rooms & no double bed, in spite of my orders! boys stand with bags while we kick(?) & have bed changed! — a scene for farce but both of us deadly serious & determination! Honeymoon!

この時オニール48才であった。長身瘦躯のノーベル賞作家がダブルベットに代えろと眼を光らせて怒っている姿は何とも滑稽ではあるが、Carlottaの留守中の淋しさの鬱積した気持の吐露としてうなづけるよりも思える。それにしてもこの妻に対する愛着が一向にかわらないことはある意味では異常といえないこともない。ここに彼の晩年「駄落ち」以後作品にあらわれる夫婦愛の理解への鍵があるよう思えるのだ。例えば The Iceman ComethにおけるHickey の妻に対する態度を考へてみよう。

Harry Hope の経営する安宿兼酒場の住人達が待ちこがれている夢を運んでくる男 Hickey は今年はなぜか夢をこわす男としてやって来た。現実生活から逃避して、実現しそうにもない希望 pipe dream に夢を託し、この酒場で安酒をあおって、たむろしている落伍者達が、年一度廻ってくるセールスマン Hickey と彼が開いてくれる陽気なパーティを待ちわびていた。だが今年は Hickey の様子が違っていた。例年は落伍者達の pipe dream をくすぐって自信を与えてくれるのに今年は一人一人説得して pipe dream を打ちこわし、現実に直面させようとする。一人づつ現実社会に向ってこの酒場のドアを出て行くのだが、所詮彼等が抱いていたものは幻想にすぎず、外部の社会には彼等が入る場所はなかった。また一人づつこの酒場へもどって来たが、前のように酒を楽しめなかつた。そして Hickey を責めるのだった。彼等を前にして Hickey は世にも奇妙な妻殺しの告白 — 「愛するが故に妻を殺した」という一見矛盾した話 — を始める。

彼自身が電話をして呼んだ刑事を含む酒場の住人を前に、少年時代のことから Hickey は話し始める。牧師を父にもつ彼には家が牢獄のように感じられ、学校も町も気にくわない。町の人々も不良扱いにしたが、後に妻になった Evelyn だけは別だった。自分も好きだったし彼女も愛してくれた。彼女だけ

は町での Hickey についての良からぬ噂も信じなかった。誰がどう言っても彼を疑はなかった。町では名家である彼女の家族もいろいろ彼女の翻意をうながしたが駄目だった。セールスマンになる決心をして町を去る前夜 Hickey は彼女に自分のことを忘れるように説得したが Evelyn は何時迄も待つという。セールスマンが性に合っていて小金もたまつたので、彼女を呼び寄せ結婚した。暫くは幸福だった。Hickey は "I'll bet there never was two people who loved each other more than me and Evelyn. Not only then but always after, in spite of everything I did — Well, it's all there, at the start, everything that happened afterwards."⁽¹⁾ という。

2人が互いに愛し過ぎていたところに全ての問題の出発点があったという。愛する妻をもち乍らも女遊びの止まらぬ彼、それは一人旅するセールスマンのホテルでの孤独がさせる業であるかも知れないが、また自由というものを味ってみたい気持もあった。そして旅から帰ってくると Evelyn は全てを感じながら許してくれる。病気をもって帰ってきて彼女に感染させた時ですら、汽車やグラスから病気をもらってきたのだという嘘を信じようと努めてくれ、全てを許してくれた。何ヶ月も女のところにいて家を明けても、普通のセールスの旅から帰ったときのように迎えてくれた。いつかは夫の所業がおさまるという彼女の pipe dream はこわれそうになかった。Hickey はこのように天使のような女性を苦しめている自分がいやになり、また彼女がかわいそうで仕方がなかった。だが彼女の pipe dream を憎むようになった。 "Christ, I loved her so, but I began to hate that pipe dream! I began to be afraid I was going bughouse, because sometimes I couldn't forgive her for forgiving me."⁽²⁾

そしてこのかわいそうな妻を救う唯一の道は、安楽死を与えることだと思うようになり護身用に与えたピストルで殺してしまう。Hickey は妻を殺したことについて次のように述懐するのだった。

"And then I saw I'd always known that was the only possible way to give her peace and free her from the misery of loving me. I saw it meant peace for me, too, knowing she was at peace. I felt as though a ton of guilt was lifted off my mind.⁽³⁾

この Hickeyが妻を殺した心理は、この劇の流れの中で一人一人の pipe dreamがあばかれていった過程では、妻の pipe dream を断ち切る方法として一応理解できるように思えるのだが、この筋道をはなれた場合には「愛するが故に妻を殺す」という論理は理解しがたいものではないだろうか。

Tom F. Driverは次のようにこの Hickey の話について述べている。

Hickey's own story, which he narrates in lengthy speech, is virtually a play within a play and is the core of the entire business. In it we learn that the peace which has so recently come upon Hickey is strangely the result of his having put his wife to death. It is a tribute to O'Neill's powers of control that the news, when it comes, is not only not shocking but carries with it that quality of the inevitable and the serene which Hickey himself feels it to have. For by this time we have moved far indeed from the natural surroundings of Harry Hope's bar and are deep within the mystical Freudian lands where life is mediated through dreams. If the very setting of the stage is mood and decor, the setting of a myth, Hickey's story reaches the audience as a distant dream which froms the clue to the myth.⁽⁴⁾

オニールの手練の語り方により観客は、現実の世界ではなくして人生が夢を通して伝えられる神秘的なフロイドの世界へ誘われているとし Hickey と Evelyn を現実の夫婦と考えるよりも、 Evelyn をフロイドのいうところの Hickey の Super-ego と考へるほうが理解しやすいとし、次のように説明して

いる。

Hickey and Evelyn are understandable as husband and wife, but they are even more fully understandable if Evelyn, the beautiful, the pure, the loving, who is never seen except through Hickey's eyes, is seen to represent what Freud would have called Hickey's Super-Ego. On this basis all her roles fit together; the ideal morality with which he invests her, the ambivalence which he feels for her, the opposition stressed between her purity and his bodily lusts (the Id), and the direct line from his killing of her to his desire for death himself.⁽⁵⁾

このように Driverの説明はそれ自身明解なものであるが Evelyn の実在を否定するかのような印象を受け、この劇が Hickey の Ego と Super-Ego の葛藤を示すフロイド心理学を具現したものであるかの如き感じを受けるのである。だがこの劇を読んだ印象はそのような抽象概念の化身というようなものではなく、Eric Betleyのいふ cultural gas に毒されて生命を失って抽象的な劇におちいる場合が多いオニール劇では例外的に、生きた人間の劇として胸に迫ってくるのだ。単にフロイド理論をあてはめただけでは説明がつかない実在としてこの劇は感じられる。だが現実にそのような夫婦の間の関係があるのだろうかと自問してみるとイエスと答えるのを躊躇せざるを得ない。

Days Without End にも同じ夫婦の関係が描かれてあったのが想い合わされる。妻の愛が重荷になって自虐的にこの愛から解放されたいと願い不貞によって愛を殺そうとした主人公 John の態度もまた Ego と Super-Ego で説明されるであろうが、それだけでは不充分なものが残ったのであった。

オニールが夫婦愛を論じた作品は少なくはないが、ここで比較の意味で Carlotta と知り合う以前 1923 年に書かれた Welded における愛の問題を考えて見よう。

Michael Cape は劇作家であり、妻 Eleanor はもと女優であって Michael の

劇の人物を演じたのが縁で結ばれたことや、共に過去の恋愛経験がありそうな点から考えるとオニール自身とCarlottaとの結びつきを予想したかのような夫婦であった。夫が創作に専念する為に家を離れていて、作品が完成して帰宅するところから始まる。久し振りに会った2人は愛に燃えるのだが、たまたま2人の共通の友である演出家のJohnが訪れる。彼はMichaelの仕事の進行具合を聞きに来たといってすぐに辞したが、夜のおそい時間の訪問でもあってMichaelはJohnと妻との間を疑い始め口論となり、夫は家を出て町をさまよへ街の女と安宿へ、妻はJohnの所へ行って彼を愛しているという。だがMichaelはいざという時に"I can't. I love her! I still love her."⁽⁶⁾といって帰宅する。妻はJohnにさとされて夫のもとへ帰る。そして2人は愛を確認するというのが一応のプロットである。この2人の愛情をもう少しきわしく考へてみるとThe Iceman Comethの場合の妻の献身とは異なる関係がそこに描かれているのに気付くのだ。2人の次の言葉をみて見よう。

Michael: You fight against me as if I were your enemy. Every word or action of mine which affects you, you resent. At every turn you feel your individuality invaded —while at the same time you are jealous of any separateness in me. You demand more and more while you give less and less. And I have to acquiesce. Have to? Yes, because I love you. I cannot live without you! You realize that! You take advantage of it while you despise me for my helplessness.⁽⁷⁾

Eleanor: You insist that I have no life at all outside you. Even my work must exist only as an echo of yours. You hate my need of easy, casual associations. You think that weakness. You hate my friends. You are jealous of everything and everybody. You would wall me in — I have to fight. You are

too severe. Your ideal is too inhuman. Why can't you understand and be generous —be just.⁽⁸⁾

この2人にあるのは自己主張であった。お互いの Individuality を主張して相手の犠牲を求める。Elenor は更に次のように自分の気持を説明する "I love him! But my love for him is my own, not his. My love for him he can never possess! It is my own! It is my own! It is my life."⁽⁹⁾ ここには The Iceman Cometh に見られるような献身的な自己犠牲的な愛はない。人間は孤独だから相手を求める。Michael も "Often I wake up in the night—terrified —in a black world, alone in time — a hundred million years of darkness."⁽¹⁰⁾ といっているように、人間の宿命といるべき孤独感から逃れるためには愛が必要なのだ。だが近代人のエゴと自己犠牲的性質をもつ愛とは相入れぬものである。これは20年代の作家のテーマの一つであった。ヘミングウェイが The Sun Also Rises の Jake と Brett の満たされぬ愛を通じて提起した献身的な愛の消滅の問題は他の作家の作品にも見られ、女性の自我意識の発達に伴う必然的現象として理解されるものであった。

オニール自身もこのテーマを Strange Interlude で発展させているし、 All God Chillun Got Wings では、人種の違いといいう問題を扱っているが、 また別の角度からみれば夫婦の問題を提起しているともいえる。ここに描かれたのは、自己主張の強い女性につくす全く献身的な夫の姿である。

だが男性の立場からすればこれは望ましくない現象であった。Welded でも Michael Cape はこの妻の態度に反撥し献身的な愛を求めている。Travis Bogard はこの夫の願いを次のように要約している。

Michael asks Eleanor to turn inward, into love, to help him cut them both away from the world outside and to lose her individuality with him in complete union.⁽¹¹⁾

外部の生活を止めて、愛へ、そして2人だけの世界を作り夫との完全な合一

のために個性を没するということが Michaelの願いであり、これが作者オニールの願いでもあるとするならば、花形女優の地位を捨てオニールとフランスの寒村で2人だけの世界を作りあげた Carlottaこそこの願いを叶えるものであったと思える。この気持は先に引用した *Mourning Becomes Electra* に附した妻への献辞にも明らかであろう。そして晩年のオニールの作品からは「自己主張の強い女性」が殆んど姿を消し、むしろ妻の献身的な愛情が重荷になるというテーマの作品が多くなる。

1936年頃に書かれた Cycle の一つの劇である *A Touch of the Poet* もこのテーマの劇である。 Cornelius Melody は自分の軍人としてのかつてのはなやかな夢を捨て切れず、今はしがない田舎の宿の亭主に過ぎないので將軍然として献身的な妻に威張りちらして生きているのであるが、娘の結婚相手の家庭との争いを通して自分の弱さを知り、妻の助力なしでは生きていけない自分を悟り地道な生活をしようと決心するという話である。妻の Nora は夫がそのように軍人時代の夢を演じない限り友を得ることも出来ず淋しく日を過ごしてきたことを知っていて、夫に好きなように生活させていた。それが彼女の夫に対する愛情であり、また誇りであると娘の Sara に次のように話をしている。

Nora: And if he wants to kape on makin' game of everyone, puttin' on the brogue and actin' like one av them in there — (She nods towards the bar.) Well, why shouldn't he if it brings him peace and company in his loneliness? God pity him, he's had to live all his life alone in the hell av pride. (Proudly) And I'll play any game he likes and give him love in it.

Haven't I always? (She smiles.) Sure, I have no pride at all — except that.

Sara: (stares at her — moved). You're a strange, noble woman, Mother. I'll try and be like you.

Sara がいっているように全く立派な女性がここに描かれている。そして

1939年のThe Iceman Comethになり、Hickeyの妻を愛する故に殺すという奇妙な論理にいたるのである。批評家たちはこの論理をTom F. Driverの例のようにフロイドの学説などをもち込んで解説しているのであるが、オニールのwork diaryを見る限り、Carlottaの献身ぶりが伺がわれ、1934年以後のオニールの健康のおとろえを考え合わせるとオニールが愛する妻への精神的負担を感じHickeyと同じような心境になったと考えるほうが素直であるようと思える。この作品を書き出した1939年6月の日記には次のような記事が多くみられる。

Feel lousy as if another sinking spell coming on bad nerves
神経症の発作に悩まされ続けていたオニールの唯一の心の支えはCarlottaであつただろうし、そして彼女の献身的な看病がかえって彼にはつらく感じられたと想像される。

世に発表された作品はもはや作者の手をはなれた公共のものでもあるともいわれ、どのように解釈を加えるのも評者の自由であるかも知れぬ。だがいたづらに心理学の理論などをもち込んで作者自身のあづかり知らないことがらを説明するのは正しくないと私は思うのである。そして今度オニールのwork diaryを読む機会をもってその感をまた深めたのである。

Notes

- (1) Eugene O'Neill, *The Iceman Cometh* (London, 1958) p.201.
- (2) O'Neill, *The Iceman Cometh*, p.205.
- (3) O'Neill, *The Iceman Cometh*, p.207.
- (4) Tom F. Driver, "On the Late Plays of Eugene O'Neill" compiled in *O'Neill* ed. by John Gassner (Englewood Cliffs, N.J. 1964) p.116.
- (5) Driver, p.117.
- (6) Eugene O'Neill, *Welded* compiled in *3 Plays of Eugene O'Neill* (London, 1958) p.67.
- (7) O'Neill, *Welded*, p.27.
- (8) O'Neill, *Welded*, p.28.
- (9) O'Neill, *Welded*, p.56.
- (10) O'Neill, *Welded*, p.89.
- (11) Travis Bogard, *Contour in Time* (New York, 1972) p.189.
- (12) Eugene O'Neill, *A Touch of the Poet* (London, 1957) p.137.

